

まえがき

かつて、「遺伝看護」は、染色体異常や稀少な遺伝性疾患を有する患者(児)やその家族への看護として、どちらかといえば専門性が高い特殊な分野としてとらえられがちでした。そのような「遺伝」を特殊視する傾向は、看護だけでなく医療全体においてみられていました。21世紀に入り、全ゲノム情報が判明し、これらに基づき疾病の機序が解明され、診断法・治療法へと発展しています。もはや、我々誰もがもつ「ゲノム」は医療における一専門領域ではなく、母性(周産期)看護、小児看護、慢性疾患看護、さらにはがん看護、公衆衛生看護など、あらゆる看護分野において遺伝医療に関する理解が欠かせなくなってきました。そして現在では、遺伝情報にもとづいた「ゲノム医療」が、国策として強力に推進されています。今後、医療の現場では「遺伝」、「遺伝子」、「ゲノム」、といった言葉が日常的に飛び交うようになります。飛び交った数だけ、患者(児)やその家族がそれらによる健康への影響や変化に適応するプロセスがあります。その適応プロセスを支えるためには、患者(児)やその家族に身近で密にかかわる私たち看護師の影響は大きく、重要な役割を担っています。

本書は、遺伝看護の普及を進めるため、看護学生が養成校での授業で学び、さらに卒業後に看護師が個人で学習することもできるテキストとして作成いたしました。日本遺伝看護学会教育委員会、日本人類遺伝学会教育推進委員会のメンバーが中心となり、これからの看護に必要な遺伝看護の知識を盛り込みました。そして近い将来、遺伝看護が「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」に明確に位置付けられることを目指しております。

テキストは2部構成となっており、<Unit 1 遺伝看護学の基礎>では、人体の構造と機能、疾病の成り立ちと回復の促進に関連した内容を解説しています。<Unit 2 遺伝看護の展開>では、出生前、子どもから成人期にわたるそれぞれの看護分野において看護学の主要概念<健康・人間・環境・看護>を枠組みとし、遺伝看護の視点から解説しています。本書の活用例として、Unit 1は1～2年生の基盤科目、Unit 2は2～3年生の看護専門科目として学修する、あるいは2～3年時にオムニバス形式の講義の一部として学修することも可能です。本書をご活用いただく教員の皆様の熱意を通して、学生の遺伝看護への関心が高まればこの上ない喜びです。

看護師は、主治医から遺伝医療部門への橋渡し、一般診療現場といった様々な立場からチーム医療の一員として「遺伝」や「ゲノム」に関わることを期待されています。本書は、看護師がゲノムによる医療の変化に適応し、ポストゲノム時代における新たな看護を展開するために学んでおきたい内容が凝縮されています。読者の皆さんがゲノム医療の担い手として活躍する未来はすぐそこまで来ています。本書がその未来へのよき道標となることを願っています。